

外国語活動・英語科における 「コミュニケーションに対する能動的態度」の育成

平成28年11月に日本学術会議が「ことばに対する能動的態度を育てる取り組み」という提言を発表した（以下、「提言」と称する）。とりまとめの中心となったのは言語学や認知科学の専門家であり、その中身については現在の学習指導要領の方向性と異なる部分も多い。しかし提言で示されている外国語教育が目指すべき姿については、英語教育に携わる多くの関係者が賛同できるものであると思われる。例えば、提言の「一定の基礎的な英語リテラシーかが普及したわが国が今後目指すべきは、英語という特定の言語の、しかも話しことばに限定した運用能力の養成ではなく、児童・生徒ひとりひとりが自ら進んで外国語に立ち向かうことを可能にする、ことば一般に対する幅広い理解と能動的態度の育成である」と考える（p.12）という一節は、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく育成しようとする中学校外国語科の目標や、外国語の学習につながるコミュニケーション能力の素地をつくらうとする小学校外国語活動の目標と矛盾するものではない。

提言の中心的な概念である「ことばに対する能動的態度」をもう少し広くとらえれば「コミュニケーションに対する能動的態度」と言い換えることができる。ここでいう「コミュニケーション」とは、ことばそのものに関する知識とその運用に関する技能の両方を包摂する概念である。そのように考えれば、コミュニケーションに対する能動的態度の育成は、本校の外国語活動および英語科が目指す「自分のもっている力を駆使してコミュニケーションを図る子どもの育成」に（部分的に）重なるものとして理解されよう。その際注意しなければならないのは、外国語において「コミュニケーションに対する能動的態度」はコミュニケーション活動を行っていけば自然と身につくものでは決してないということである。提言の「児童・生徒が英語を聞いたり使ったりするうちに「自然に」英語に慣れ、その仕組みを習得するだろうと期待することは止めるべきである」（p. 12）という指摘は、狭い意味のことばだけでなく、より広くコミュニケーション一般にも当てはまる。

そのような観点から、コミュニケーションに対する能動的態度の育成に関する留意点を2点指摘する。ひとつは、特に中学校段階において、言語活動を通して基本的な文構造、特に語順の指導を徹底することである。実践的なコミュニケーションを支える知識として文構造の理解は欠かせない。従来の訳読式による文法指導が「壘の上の水練」としてしばしば批判されることがあるが、他方で生徒を水の中に突き落として指導者が丘の上から見ているだけでは、生徒は溺れてしまうであろう。指導者も水の中に入って一緒に泳ぎながら手足の動かし方（＝文法知識）を教える姿勢が重要である。基本的な知識があってはじめてコミュニケーションへの能動的な態度も育成されるのである。もうひとつの留意点は、よりよい情報伝達のための到達目標を指導者と生徒で共有するという点である。島根県では中学校におけるCan-Doリストの整備が進んでいるが、授業への活用という点では多くの課題が残っているように思われる。「書くこと」や「話すこと」のルーブリックを生徒にも提示することで、生徒に学習の目標と見通しを持たせたい。コミュニケーションに対する能動的態度を育てるためには、普段は無意識のうちに行っていることばのやりとりをルーブリックなどで意識化・可視化することが効果的であろう。

（共同研究者：言語文化教育講座 縄田 裕幸）

【参考文献】

日本学術会議 言語・文学委員会 文化の邂逅と言語文化会（2016）「ことばに対する能動的態度を育てる取り組み―初等中等教育における英語教育の発展のために―」